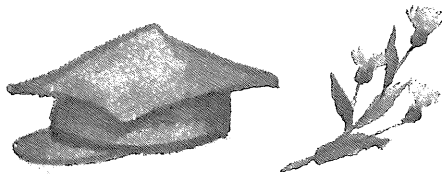


## 共通試験の時代(1)



名古屋大学教育学部教授  
佐々木 享

## 共通試験時代の幕あけ

1979 (昭和54) 年1月13日(土)、14日(日)の2日間、最初の「共通第1次学力試験」が実施され、国公立大学志願者32万7千余人がこれを受験した。

第1日は正午から、国語(100分)、理科(120分)の2科目、第2日は朝から社会(120分)、数学(100分)、外国語(100分)の3教科が実施された。共通試験時代の第1幕があげたのである。

第1幕は国立大学と公立大学だけの時代、第2幕は、国公立大学のほか一部の私立大学も参加する「大学入試センター試験」の時代で、1990(平成2)年1月に始まった。

この第1幕の開幕1年前の1978年1月には本『大学進学研究』誌が創刊された。創刊号は、77年12月に実施された共通第1次学力試験の試行テストの英語、数学、国語のテスト問題とその解説に全82ページのうちの8割をあてていた。その意味でいえば、「共通試験の時代」は、本誌自身が歩んできた現代史でもある。

## 最初の経験

国公立大学の志願者が全国一斉に共通の試験

を受けるという方式は、共通第1次学力試験が初めてではない。1947年から1954年まで実施された「進学適性検査」も、1963年から1968年まで実施された「能研テスト」も、全国一斉テストであった。しかし、「進学適性検査」はその名の如く学力試験ではないとされた(本連載第23回参照)。能研テストは実施形態としては全国一斉学力試験ではあったけれども、現実にこれを入学者選抜の資料として採用する大学が皆無に近かった(本連載第24回参照)。

こうした経過からみると、1979年に始まった「共通第1次学力試験」は、大学入学者選抜のための全国一斉の学力試験であり<sup>\*</sup>、しかも現実にすべての国立大学がこれを入学者選抜の重要資料として扱ったという点でも、そしてそれが<sup>\*\*</sup>永続しているという点でも、新学制下の最初の経験であった。

\* 同一問題で一斉にテストを実施する方式は、都道府県単位の公立高校入試では、最も一般的なものである。

\*\* 旧学制下の高校では、1902~1907年、1919~1925年に同一問題による共通試験を実施した経験がある。

## 長い助走

国立大学としては最初の経験である共通試験が、たんに永続しているだけでなく、1990年からは「大学入試センター試験」と改称して私立大学をも巻き込むかたちで発展してきたについては、いくつかの理由がある。そのひとつは、いま振り返ってみると驚く程に短期間の準備で発足した能研テストにくらべて<sup>\*</sup>、共通第1次学力試験が、その最初の問題提起から実施までの間に実に約9年の歳月を費やしていることである。

\*1963年11月に第1回が実施された能研テストの構想は、公表資料にみる限りは、1962年10月の中央教育審議会の中間報告「大学入学試験について」に始まっている。それ以前の準備過程を解明した研究は知られていない。

## 個別大学の2次試験との組合せ

### ——共通試験の存在形態の特徴

わが国の大学入学者選抜制度のおそらく最も重要な特徴は、入学者選抜は大学(学部)がそれぞれ独自に実施するものと大学人に理解されているところにある、とおもわれる。

これとの関連で見ると、1979年に始まった国公立大学の入学者選抜の特徴は、共通第1次学力試験の結果だけではなく、それを個別大学(学部)の実施する第2次試験と組合せて利用するというかたちで、結果として、入学者選抜は大学(学部)がそれぞれ独自に実施するという原理を生かしている点にある。

それにしても、共通第1次学力試験という外部の者が実施する試験の結果を自己の大学入学者選抜の資料の一部として利用する、という新しい原理を採用するまでには約9年の歳月を要

したわけである。もちろんたんに歳月をかけただけで容易に転換できるものではなく、この転換を可能ならしめたのは、共通試験を国立大学の共同事業として実施するという原理であり、表看板であった。実際、共通第1次学力試験の試行テストは、国立大学協会の事業として始められた。

### 発端をめぐって

しかしながら、共通試験の導入という新制度は、国立大学の主導のもとに創設されたわけではなかった。

共通試験と個別大学の試験との組合せという新制度が生まれる発端についての説明は、論者により、いくぶん違った点がある。

①文部省は、71年12月に大学入試改善会議が提出した報告から説き起こし、「国立大学共通第一次学力試験は、国立大学関係者の多年にわたる自主的な調査研究の成果と、その実施に関する高校長協会等の強い要請を受けてこれを取り上げたもの」と説明している(大学局学術課『大学入試関係答弁資料(52.3)』)。これは、いわば公式見解であり、表看板である。それにしても、文部省が設けている大学入試改善会議の報告から公式見解を説き起こしていることは注目される。

②ジャーナリスト・本多二郎は、高校長協会が大学入試対策委の名で70年に提起した報告から説き起こしている。

その骨子は、「大学は高校の調査書を重視して入学者を選抜してほしい。高校間に学校格差があるので評価の物差しがほしいと大学側がいうのなら、統一テストを大学と高校の共同機関で

実施し、その結果と調査書を併用したらよい。一次試験と二次試験を実施する場合、一次査定の足切りは調査書だけにより、定員の2～3倍で切ること。これまで国公立大の入試は英数国理社の5教科7科目だったが、私立大学のように科目数を減らすことも認めよ」というもので、この時初めて調査書重視とからんで統一テストの考え方を打ち出した。この年以後、高校長協会は毎年調査書重視と共通テストを入試改善会議で主張することになったという(本多二期『共通一次試験を追って』)。

本多は、入試改善会議が1970年12月に「中間発表」し、1971年12月にまとめた最終報告で「調査書、共通テスト、大学独自試験の3つ併用による、選抜」を入試改善の方向として掲げ、そこで「調査書と共通テストで基礎的な能力適性を、また大学独自試験で専門分野の能力適性を判定することが適切だろう」とうたったのは、

上記の高校長会議の動きを受けてのことだという。

③一方、後に表看板となる国立大学協会(国大協)が入試調査特別委員会の設置の可否の検討を開始したのは70年11月で、アンケートの結果をふまえて同特別委を設置したのは71年2月であった。同特別委が「全国共通一次試験に関するまとめ」を公表したのは72年9月、翌10月にはこれを同協会理事会が了承した。

国大協が入試改善調査委員会を設置したのは73年4月で、同年から文部省の事業費の交付を受け、調査研究を開始した。同委員会は74年3月に中間報告公表、同年11月には第1回プレテストを実施した。この頃から、ジャーナリズムなどで、「国大協の共通第一次試験」などといわれるようになる。

④しかし、大田堯は違った点に注目している。すなわち、「今度の共通試験につながってくる大学入試改善方法としてのアイデアは、1969年12月に中教審がつくりました大学入試合同小委員会の提案にまず出発」しているようにおもうと述べている（大田『入試制度改革論』107頁）。実際、大田は言及していないけれども、中教審は早くも70年1月には「高等教育の改革に関する構想試案」を発表しており、この中で共通テスト構想がしめされている。

こうした経過からみて、「国大協がイニシアを取ったというよりも、文部省の筋に乗せられたというふうに判断せざるを得ない」と大田は述べている（同上書、106頁）。

⑤国大協自身は、『国立大学入試改善調査研究報告書』（1977年3月）の中で、今回の改革の動きの発端を、入学試験の諸問題につき連絡協議を行ってきた同協会第二常置委員会が69年11月に、東京大学の入試制度調査委員会委員長の出席を求めて意見交換したことから書き始めている。東大には、進学適性検査の廃止以来、2段階選抜をするために学力試験を第1次、第2次に分けて実施してきた経験の蓄積があったからである。

#### 生かされた能研テスト失敗の教訓

以上のいずれがより真実に近いのか、判断に供すべき史料はあまりに少ない。しかし、いずれにしても、能研テストの廃止直後に新しい動きが始まったという点では共通している。このことは、能研テストの廃止が、新しい動きの始まる契機になったことを示唆している。

ところで、文部省は、1976年度入試の『実施要項』に添付した文書のなかで、能研テストの

廃止の理由をつぎのように説明していた。

「……同研究所の事業は、その実施するテストが入学選抜に採り入れられるのでなければ恒常的に実施することは困難なものであり、加えて受験者数の減少による財政上の理由、将来への見通しもはっきりしないなどにより、昭和43年度をもってテスト事業は中止することとなった。

能研テストが中止された主な理由としては、次のようなものが指摘される。

- (1)中教審答申から能力開発研究所の設立までの設立準備期間がなく、また設立年度から直ちに事業が開始されるなど事前準備に十分でない面があった。
- (2)能研テストの趣旨を周知する広報活動及び各大学、高校等の意見の集約が十分行われない面があった。
- (3)実施機関が財団法人であり、財政上の問題、職員の身分保障の問題等に難点があった。
- (4)大学側に自らの問題として受けとめる熱意が薄く、能研テストの活用にも消極的であった。
- (5)反対運動が当時の学園紛争に結びつき、将来への見通しを暗くした。」

いくつもの理由があげられているけれども、大学側に自らの問題として受けとめる熱意が薄かったことが失敗させた、としている点が最も重要で、国立大学自身の問題として受けとめるよう仕向けること、「文部省の共通テスト」ではなく、「国大協の共通テスト」とすることは、苦い失敗から得た教訓を生かす最良の道だったに違いない、と私にはおもわれる。